

石鯛を釣る

白石病院 鴨川 淳二

手術に疲れたら磯に行く。私は磯釣りが好きだ。一日中見えない敵と対決する。竿の傍らに座り穂先に集中。夢中になれる時間だ。

釣りは小学生の時からやっている筋金入り。今治の海で鍛えてきた。磯釣りを始めたのは25歳。入門はグレ釣り、30歳で石鯛に変更。ホームグラウンドはもっぱら南予の磯。中でも日振島（宇和島市）がお気に入りだ。ゴロタ場が多いこの島は穏やかで、たおやかな雰囲気がある。

石鯛釣りは、海底を狙うので「底もの釣り」といわれる。多くの場合、足場直下の12-14m水深を狙う。餌はウニ。一回の釣行でガンガゼ（ウニ）なら50-80個を用意する。撒き餌は赤貝やウニガラを用いる。

仕掛けはいたって簡単。ライン・瀬ずれワイヤーに捨てオモリをつけ、ワイヤーハリスに石鯛針。磯場にピトン（専用の竿置き）を叩き込み、それに竿を置いてひたすら当たりを待つ。

石鯛釣りの最大の魅力は、ピトンに備え付けられた石鯛竿が海中に絞り込まれる瞬間だ。「コツコツ・ガンガン」とした前当たりから、大きな振幅の当

たりが数回続き、そこから一気に竿先が水中へ突っ込んで行く。この間ドキドキしながらひたすら待つ。早あわせは禁物だ。

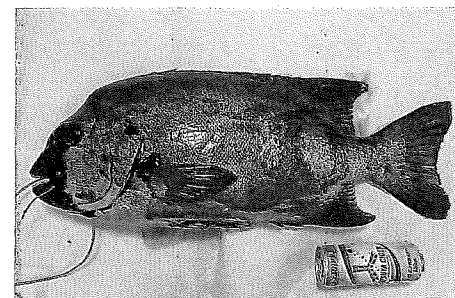
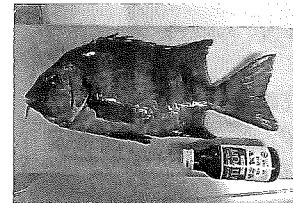
石鯛が食いついた後は、一気に合わせ竿をピトンからはずす。対応が遅いと魚は更に海底の根にもぐってしまう。フッキングのあと竿をおこすと一気にリールを巻きあげる。途中、石鯛は左右に平走りするが、これを食い止め、こらえながら必死で巻き上げる。魚影が見えると一度水面から少し浮かせ、その後一気にぶち抜く。タモ網は使わない。

二つ目の魅力は、なんとといっても魚自身の美しさにある。精悍な顔、全体に鈍色に輝く魚体は見飽きない。ほれぼれと眺めてしまう。特に60cmオーバーの歳無しの石鯛は独特の色で美しい。銀色・黒・白・紫・ピンクが独特のモザイクを織り成している。妻はかつて「シーラカンスみたい」と言ったことがある。



石鯛（本石）は小さいうちは7本の縞があるが、大きくなるにつれて縞が薄れ、独特の銀色になる。この色から「銀ワサ」との異名もある（写真下）。

さて去年は13年ぶりに60cm超を捕った。日振島7番で仕留めた。大潮初日の朝8時（引き潮1時間10分）。その日は水温が下がっており、餌取りの石垣鯛の当りもなかった。抜群の風であったが、潮も動かず、渋い釣りを予想していた朝の5投目のことだ。突然の大当たりで竿が舞い込んでいった。すぐに竿を立てて応戦。途中3回強力に引っ張り込まれたがこれに耐えた。竿がメシメシと悲鳴をあげた。上がってきたのは惚れ惚れする見事な「銀ワサ」。満ち満ちたる達成感と虚脱感に襲われた。



青年から成魚へ。雄（オス）は縞が消えてゆく。顔と尾びれの付け根の形にも注。

本石3.7kg, 2013/12/16

と、まあこの様な調子です。一人で気ままに行くのも楽しいが、もう一人釣行に参加してくれないかと思っている。